

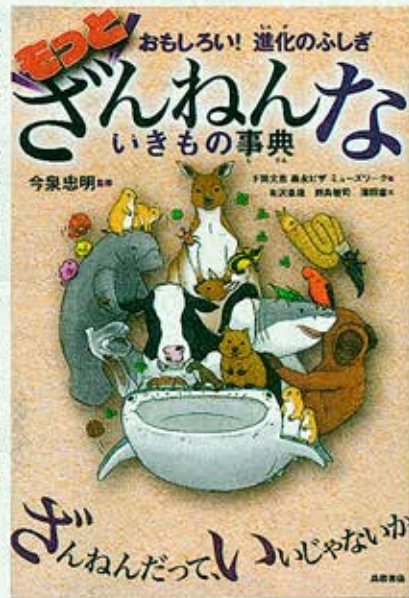
今回は少し趣向を変えて、子ども向けの本を読んでみることにしました。取材先も仕事場の事務所ではなく、最近ハマっているペルー料理のお店。遠く離れた国ですが、豊かな海と山の幸を生かした料理は今、世界で注目を集めているそうです。料理もビールも日本人の口によく合います。

さて、さんねんないきもの事典は、これまで計3冊が刊行され、今回選んだ本は4冊目となるシリーズ最新刊です。出版されるたびに話題になっていたことは知っていました。タイトルにひかれ手に取りました。

内容は、哺乳類や爬虫類、昆虫といった動物の特徴をユーモラスに解説したものです。簡潔に表現した短い文章とともに、分かりやすくかわいらしいイラストが人気の秘密のようです。

子ども向けと思うのは大間違いで、大人が読んでも奥深く、勉強になることばかりでした。

例えば「体がさんねん」の章では、アフリカ大陸の東に浮かぶ島国、マダガスカルに生息するワオキツネザルが取り上げられています。体温調節が苦手で体が冷えやすく、朝は太陽の光をたっぷり浴びないと動けません。その様子を描いたイラスト



が秀逸！ 太陽に向かい、目を閉じて両腕を広げるサルたち。「すべてを受け入れんとする慈愛のポーズ」と書かれている通りの姿です。寒い日には長いしっぽをマフラのように首に巻くこともあるそうです。まさに生きるための知恵だと感心しました。

「生き方がさんねん」の章には私たちに身近なネコが登場します。なにが残念なのかというところ、キュウリが怖いのだそうです。えさを食べているネコの後ろにそっとキュウリを置くと、驚きのあまり空中を飛び上がって逃げるのだとか。へびに見えるからという説があるそうです。

決して本の内容を疑っているわけではないのですが、つい書かれている通りなのだろうかと頭の片隅で思ってしまうのは弁護士という職業柄でしょうか。確かめなければ

## 何とか生きる動物に共感

ば気が済まなくなり、早速動画投稿サイト「ユーチューブ」にアクセス。ワオキツネザルもネコも映像で動きを確認できました。おなかを抱えて笑ってしまったのは言うまでもありません。

本書にはほかに「ガラパゴスゾウガメはひっくり返ると立ち直れない」「キリンの赤ちゃんには、うまれてすぐにいるんな試練が待っている」など、興味深いものばかりが収録されています。

シリーズの魅力について、監修した動物学者の今泉忠明さんは「残念な面があっても何とかやっている生き物がいることに、共感が集まったのでは」と語っています。私自身も動物たちにこれまで以上に親近感が湧きました。

それだけでなく、動物たちの求愛行動の機微や生命維持と無関係ないたずらなど、大人にこそ「くすっ」と笑っていたらいい箇所がたくさんあります。決して上品とばかりは言えない文体がクセになっていますね。

(談) 聞き手・井上光悦

◇ 「読書三昧」は水田美由紀さんら5人が交代でお薦めの本を紹介、毎週火曜日に掲載します。



みずた・みゆき 倉敷市出身。岡山大学法学部卒。1991年、岡山弁護士会入会。96年4月、水田法律事務所(現鳥城総合法律事務所)開設。2016年4月から1年間、岡山弁護士会長として活躍した。現在、岡山市ふれあい公社副理事長を務め、高齢者問題にも関心を持つ。高校生の時に読み、主人公に魅了されたアガサ・クリスティの推理小説「ミス・マープル」が、弁護士を志すきっかけの一つになった。